



# いのちの水

## 目次

- ・主よあなたの助けを 1
- ・全国集会の恵み 2
- ・神の言葉 希望に生きる 3
- 全国集会での証し、聖書講話から 7
- ・酪農に出会って 西川求 7
- ・混じりけのない霊の乳 貝出久美子 10
- ・神に従う者は命を持つ 永井信子 14
- ・報告とお知らせ 16

二〇一六年 五月号 六六二号

まことに、あなたは弱い者の咎、苦難に遭う者の咎。…死を永久に滅ぼしてください。神はすべての涙をぬぐってください。 (イザヤ25の4〜8より)

## 主よ、 あなたの助けを待ち望みます。

り願っています。

## キリスト教(無教会) 全国集会の恵み

今回の熊本を中心として大分や各地で、地震災害を受けた方々、今もなお、先の見えない苦しみや悲しみにある方々に、援助の手が差し伸べられ、精神的にも、その困難に耐える力が与えられますように。

とくにかからだの弱い方々、障がいのある方々にとって、避難所などの生活には安眠できず、心身が安らぐことがなく、耐えがたいものがあると思われまます。

5月14日(土)〜15日(日)と、徳島市で、キリスト教(無教会)全国集会が開催された。参加者は、北海道から沖縄まで、そして韓国からも参加者があり、当日参加者も含めて、140名ほどが集った。

さらに、その前日の13日夜と終了後の15日夜にも交流集会がなされた。

信仰は私たち一人一人と神(キリスト)との関係である。

周囲の人がどのようであろうとも、また、私たちがいかに病気その他で弱かったり、さ

らには、過去から現在に至るまで重い罪を犯してきたとしても、私たちが主を仰ぎ、魂を神へと方向転換すれば救われる。

これはキリスト教の根源的真理である。

…地の果てに至るさまざまの人たちよ、私を仰ぎ望め、そうすれば救われる。

(イザヤ45の22)

このことは、信仰によって義とされる、というキリスト教の真理のことであって、この点では旧約聖書からすでに新約聖書の根本にある真理が示されているのがわかる。

真理はこのように個人的に示され、与えられる。

しかし、聖書はまた、共同体としての信仰の重要性もまた強調している。

よく引用されるつぎのことばも重要である

…私の名によって二人三人集

その苦難と闇のなかに、神の光が射し込み、神の言葉が与えられ、愛の神へと魂の方向転換がなされますようにと祈

まるところには、私もその中にいる。(マタイ18の20)

一人、三人が主の名によって集まる、この言葉には、どんなに少数であっても という意味が込められている。

文字どおり一人三人であつても、あるいは百人二百人であつても、日本全体からすればきわめて少数であり、そうした少ない人たちであつても、主を中心として集まるとき、キリストもまたその中にいてくださる。

あるいは、また次のようにも記されている。

…あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその部分である。

(コリント12の27)

ここに、キリスト者とは、目には見えない霊的なキリストの一部であり、それゆえに深く結びついていることがしめされている。

そのことから、ともに祈り合うこと、ともに集つて賛美、礼拝すること、み言葉をともに受けることの重要性がこのわかり易い表現によって示されている。

今回の全国集会においても、信じる人たちが集まるときに、そこに主がいてくださる、そこには聖なる風、聖霊が吹いてくださるのを覚えたことである。

一人だけの本や祈りによる学び、研究によつても主は顧みてくださる。祈るときは、戸を閉めて祈れ、といわれているとおりである。

しかし、一人だけの祈りや学び、研究では与えられないことがある。それは、いま生きてみ言葉を実行している人、神の言葉によつてじっさいに人間が動かされていること、神の言葉が現実の目に見える世界において、そのはたらきを表していること、そうしたことは、一人だけの学びや研

究ではわからない。

キリストの使徒たちのうちでは最も大いなるはたらきをしたといえるパウロもまた、自分で考えてそのようなはたらきができたのではない。

組織の会議、話し合いによつて決めて派遣されたのではない。それは、聖霊によつて集まった人たちがうながされ、心一つにされて、パウロを遠い国々へと送り出すことが決まったのであった。

(使徒言行録13章1〜4)

パウロ一人ではこのような異邦人伝道ということは起こることのなかったのだと知らされる。

このように、神は、その御業をさまざまの人、その集りによつてなされることがしばしばである。

このことは、こうしたキリスト教の集会にかぎらない。

松の葉一つでは、何らの響きもない。しかし、大量の松の葉が合わさった松の大木に風

が吹きつけるとき、ほかにはないような重々しい、風格のある響きが生じる。

私の通った小学校の近くには、かつては数百年を経た松の堂々たる大木の並木があつた。

また、わが家のある山には松が大量に生育していて、頂上近くには、見事な松林もあつた。

それらが、風のある日には、その独特の音楽を奏でているのを別世界からの響きのように聞き入ったものだった。

それゆえ、古来から、松風の音は、松籟しょうさいとか松韻しょううんとか言われて、人々の心に深く入っていたのだった。

今回の全国集会も北海道から沖縄までの各地から集められた人たちの祈りが合わされ、そこにいつもの日曜日の集会では与えられなかった恵みのわざが行なわれた。

まず全体としての賛美によつて、少数の集りでは与えられない力強い賛美が参加者の心



の内に広がった。

み言葉を共有することによってそのみ言葉の力が、参加者にやどり、全体として御国の力が感じられた。

さらに、そこには、出会いが与えられた。この全国集會がなかったら決して出会うこともなかった方々、そして韓国からの方も参加されていた。

よき出会いは、そこからまた新たな命の水が流れだして周囲に及ぶ。

また、いつもの日曜日の集會には参加されていない方々、未知の方々なども十数人が参加されていた。

地域や年齢、からだに障がいがあるかないか、また、信仰的な体験や学識などの有無、その状況など、そうしたさまざまな違いを越えて、一つに溶け合わせる力がはたらいた。それは聖霊の力だった。

その集會に注がれた聖霊の力はまた、個々の人たちとの出合いにおいても聖霊の力が与

えられた。

しかし、こうした全国集會には参加できない方々も多い。

それゆえに、参加できた方々は、受けた霊の賜物、力、み言葉を少しでも、周囲の方々に分かつことが期待されている。

具体的には、集會や友人たちに、そこで語られた内容や用いられた聖書の言葉を語り、手紙やハガキに書いて送る、あるいは、全国集會の全部の内容が録音されてMP3形式でCDにされるので、それを購入して希望者に手渡す等々、各人で可能な方法で伝えていくことによって、より祝福されたものとなる。

目に見えるものは分かつことで減少していく。

しかし、真によきものは、分かつことでさらに豊かになる。祈り一つとっても、自分のためだけの祈りより、他者のための祈りをなすときには、霊的な恵みはさらに広がっている。

くのと同じである。

## 神の言葉 希望に生きる (その1)

5月14日、15日、徳島市で開催されたキリスト教(無教会)全国集會で語ったことに一部追加したもの。

私は神の言葉によって変えられた。21歳のころ、たった一冊のしかもその一ページのわずかな記述によって、生涯の方向が変えられて今日に至っている。

それは、キリストの十字架の死は単なる犯罪人として処刑されただけの死でなく、人間の根本問題である心の問題、どうしても純粋な心、愛、真実などが持てない、それに従えないということ、それを罪と知っているのだということも初めて知らされたし、キリストは、その罪を担って死んでくださったのだと知らされたのだ。

そしてそのことが神の言葉と

して新約聖書に記されているのが示されていた。そこから、

キリストは十字架の上から、「あなたの罪は赦されたのだ」と語りかけてくださったというこのことを知らされた。そして闇のなかの閃光のように、それまでまったく考えたこともないキリストの十字架とか神の愛ということが私の魂にぱっとひらめいたのだった。私を根底から変えてくれたのは、いかなる人間でも人間の思想でも文学でもなく、新約聖書の中心にある単純な神の言葉であった。

神の言葉、それは聖書においては、きわめて重要なものとして最初から記されている。

まず、それは天地宇宙を創造する力を持つことが示されている。そのことは、聖書の二千頁に及ぶ内容の最初に記されている。そこでは、神が天地創造をしたとは記さず、あって神が「光あれ!」と言わ

れたゆえに、光が存在するようになった、と記されている。神の言葉によって創造されたことが強調されているのである。

そして、闇と混沌、空虚と荒廃の状況のただなかにあつても、神のひと言によって光が生じるようになる。これこそ、永遠の希望である。

そして、後に現れたキリストによって、その光には、死の力にうち勝つ神の命があるということが明確に示されたが、この創世記の言葉はそのようなことをもすでに暗示するものであった。

ここに、聖書は神の言葉というのをきわめて重大なものとしているのがただちにうかがえる。

光に次いで、創造された大空や海、植物なども神が言葉を発して、「地は草を芽生えさせよ！」言われたゆえにそれらが存在するようになったと記されている。

神の言葉の重要性は、さらに、信仰の父としてキリスト教だけでなく、ユダヤ教やイスラム教においてきわめて重要な位置を占めているアブラハムにおいても、彼のその大いなる影響力が生まれるに至ったのは、神があるときに、次のように語りかけたからであった。

「生まれ故郷を離れ、私が示す地に行きなさい！」(創世記12の1-3)

このアブラハムに語りかけられた神の言葉によっていつさかいが変わったのである。この神の言葉に従うことによって、カナンの地(パレスチナ)がイスラエル民族が住む地域となり、以後神の民が広がっていく基となった。

さらに、いろいろないきさつした後、飢饉のためにエジプトに行くことになり、そこで増え広がったが、そのエジプトにおいて、厳しい迫害を受ける状況となり、滅ぼされよう

としていたイスラエルの民族が救い込まれたのは、モーセによってであったが、そのモーセを動かしたのも、神がモーセに語りかけたからであった。

イスラエルの人々の叫びが、今、私のもとに届いた。今、行け。私はあなたをエジプト王のもとに遣わす。我が民イスラエルをエジプトから導き出すのだ。(出エジプト記3の9-10より)

モーセは、生まれたときにナイル川に投げ込まれることになっていったが、家族の何とかして生かしたいという切実な願いのゆえに、防水された入れ物に入れて川に流された。それをエジプトの王女が見いだして拾いあげ、自分の子供として、エジプトの王子として育てた。しかし、成人したころ、イスラエル人と発覚し、命がけで砂漠地帯を越えて、遠い地域まで逃げていく

ことになった。そこで結婚し、のどかな羊飼いの生活をしていったのだ。そのようなモーセに突然さきほどの言葉がモーセに言われたのである。

それによってモーセは力が与えられ、素手で大国エジプトに向っていくことになった。

神の言葉はそのような驚くべき力を与え、人間的な思いからは到底考えられないことを指し示し、導くことが示されている。

その結果、最終的には、モーセはただ神の言葉、神の力によって、強大なエジプトからおびただしい民を救いだし、さらに、荒野の40年という苦難を経て、神の約束の地、カナンへと導いていくことになり、そこで、神の民は神の言葉を受けつつ、歩んでいくことになった。その子孫からキリストも生まれることになったのである。

その後、イスラエル民族は、

何よりも重んじるべき神の言葉がないがしろにし、神ならぬものに行き、神に背を向けていくことになった。そのことは滅びへと直結していった。

そうした神の民の滅びゆく状況にあつて、神の呼びかけの言葉によって一般の人間のなかから、とくに選り出され、

神の言葉によって警告し、神に立ち返ることを命がけで語り続けたのが、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル等々、大いなる預言者たちだった。

そうしてはるか後に、大いなる救い主が現れるということが神の言葉として語りかけられたのであった。

新約聖書の時代になって、主イエスの弟子たちはみな、イエスの呼びかけ、語りかけによって、イエスに従うものとされた。主イエスの言葉とはすなわち神の言葉である。

「私に従ってきなさい。」と

いう単純なイエスの言葉が、弟子たちを動かして、今日のキリスト教の世界的な広がりのもとになった。

このように、聖書では大いなるはたらきはみな、一人一人の人間にふさわしい神の言葉が与えられたゆえである。

しかし、神の言葉はそのような聖書に記されている人たちだけに語りかけられているのではない。

神は万物を創造された。神と同じ本質を持つているキリストもそれゆえに、万物創造に深くかかわつておられると聖書には記されている。(ヨハネ福音書1の1〜3、ヘブル書1の2〜3、コロサイ書1の15〜17)

神の御心によって創造された。その御心とは、愛である。それゆえ、自然のさまざまのものは、神の無限の愛ゆえに、創造されたと言える。

しかし、神の愛とは、人間には計り知れない深さと広大さを持つゆえに、人間に生じたさまざまの苦難、ハンセン病などの苦しい病気や事故、失明などからだの障がい等々、

いかに考えても愛などと受けとれないようなことであつても、後に信仰が与えられ、そこに神の愛があつたと実感させることがあるほどに、奥深いものである。

その点、例えば人間の母親の愛は子供に、病気や失明をさせたりするなどは考えられない。このように、神の愛といつても、人間の思いや感情では計り知れないところがある。

自然に込められた神の愛など同様で、どうしてこのような自然のできごとが神の愛といえるのか、不可解なことも数々ある。そうしたこと、またしばしば長い時間を経て、神からの啓示によって、それら

もまた、深い神の愛ゆえに生

じたのだと示されるのである。聖霊こそは、すべてを教えると言われているとおりである。(ヨハネ16の13)

私たちの毎日の生活においてみられる全体としての大空の姿、永遠の光と清さを表して輝く星々、大空の青、雲のた

たずまいとその純白や夕日や朝の色合い、木々の緑、変化にとんだ草木の花々、小鳥のさえずり、あるいは山のたたずまい、渓谷の水のながれとその音、海の広大さ、その深く青い世界、風のそよぎ、…

等々、かぎりなく存在する自然のさまざまなのは、その広大さ、色調、変化、力、永遠性、音などじつに多様なもの

のによって神の創造の力の偉大さ、そして私たちに語りかけ、慰め、励ますものがたえられており、そこに神の私たち一人一人への愛が込められている。

人間の一瞬のまなざしや、短

いひと言によっても、私たちは愛を感じることがある。そのように、小鳥のみじかいさえずりは、木々が風にそよぐ姿やその音を耳にするだけでも、混じり気のない清いはげましを感じるものがしばしばある。それはそこに神の愛が込められているからである。

神の言葉によって、万物は創造された。神は愛ゆえに、それらは愛によって創造されたのだ。このことは、繰り返し私の心にひびいてくる。

キリスト教詩人として、歴史上でもとりわけ重厚かつ広範な内容をたたえた長大な詩を生み出したダンテ、その詩の作品とは神曲である。

私たちのキリスト集会でも、だいぶ以前に、10年をかけて、学んだことがあったし、さらに何年か前にも煉獄篇だけを数年かけて学んだことがあった。

そのころは、人間の生きざま、

苦難、祝福とさばき、人間の愛と神の愛と正義、権力者の腐敗、聖なる世界からの音楽美、また、当時の政治社会の状況や科学的な見方、そして煉獄篇のかなりの部分や天国編においては、神とともにある究極的な幸いの世界が示されている。等々人間のかかわるあらゆる領域にわたって触れられている。果てし無き闇の世界から、光に満ちた天の世界にいたる内容であって、全体として神の偉いなる力による導きがテーマとなっている。

その作品は地獄篇、煉獄篇、天国編の三部から成っているが、その三部の最後の言葉はすべて星(stelle)で終わっている。例えば、地獄篇の最後の行は、つぎのように記されている。イタリア語原文と英訳、日本語訳で示す。

in quindi uscimmo a riveder le

stelle. (原文)

・ Thence we came forth to behold the stars. (Longfellow 訳)

・そしてそこから我らは、再び仰ぎ見ようとして外に出た、かの星々を。(寿岳文章訳)

「」のことは、当然のことながら、古くから注目されていることであり(＊)、私たちにとっても、いかにダンテが星のことを重んじていたかを感じ取ることができる。

(＊)このことに関して、ダンテ研究で知られた注解者もつぎのような短いコメントを付けている。Each of the three great divisions of the poem ends with the sweet and hopeful word stelle. (C. H. Grandgent)

(「」の詩の三つの重要な区切りのそれぞれにおいて、うるわしくかつ希望に満ちた言葉「星」で終わっている。)

ダンテの神曲 それは人間を導く神の愛が根本的な内容で

ある。その三つの部分の一つ一つのために、星(原文は複数形)という言葉を置くのは、3行ごとに厳密に韻を踏み、リズムも整然と整えた詩にあつて、意味も不自然でなく表現するのは、容易なことではなかつたはずだが、神はダンテに歴史に残る作品とするために、とくにそのような困難なわざをなす靈感を与えたのであつた。

聖書においても、その最後にある黙示録の最後の部分に、この世界を究極的に完成する神の力がくだされることを待ち望むところで、その再臨のキリストが、明けの明星として表現されている。

「」にも、星というものが、最も高い霊的な意味、神の愛の表現として受けとられてきたのがうかがえる。

「」とした身近に与えられている自然を通して、神はたえず、その愛を注ぎつとされている。

神の言葉 それは聖書のなか  
だけでなく、周囲のさまざま  
の自然の風物に書き込まれて  
いて、さらにそれらは私たち  
に語りかけているのである。

### キリスト者の証言

(無教会の全国集会にて)

酪農に出会って

北海道 西川 求もと

私は静岡に生まれ、子供の  
頃は父の転勤で東京の荻窪や  
清水の折戸に住み、小学5年  
で実家のある静岡に帰ってき  
ました。

中学を卒業すると山形県西置  
賜にある基督教独立学園高等  
学校に入学が許され、3年間、  
野山を駆けずり回り、農家の  
田植えや稲刈りを手伝い、合  
唱の楽しさを知り、「人の行  
かないところへ行き、人の嫌  
がることをしなさい」と教え  
られたのです。

そして、山深い自然の中で、  
つぎの聖句に言われているよ  
うに、神様の創られた自然の  
素晴らしさに心奪われた3年  
間でした。

『鳥の事を考えてみなさい、  
種も蒔かず、刈り入れもせず、  
納屋も倉も持たない。だが、  
神は鳥を養って下さる。』

『野原の花がどのように育つ  
かを考えて見なさい、働きも  
せず紡ぎもしない。』

しかし言うておく。栄華を極  
めたソロモンでさえ、この花  
の一つ程にも着飾ってはいな  
かった。

今日は野に在って、明日は炉  
に投げこまれる草でさえ、神  
はこのように装って下さる。

まして、あなた方にはなおさ  
らの事である。』(ルカ福音書1  
2章24、29)

3年生の夏休みにかけて修  
学旅行の行き先を14名の同

級生で相談しました。みんな  
の行かないところへ行こう。  
北海道はどうだろうか。19  
57年、60年も前の事です  
が北海道と言えば、熊の出そ  
うな鬱蒼とした原始林と開拓  
農家と言うイメージでした。

そういう所へ行ってみたい、  
出来れば開拓農家で働かせて  
もらえないか。夢がどんどん  
膨らんで調べて行くと、先輩

のお父さんが獣医さんで、根  
釧原野で働いているのを知り  
連絡を取り、開拓農家へ一人  
または二人に分かれて1週間  
お世話になって働くことにな  
りました。

そこは荒漠とした未開の地と  
いった印象で、所々にぼつん  
ぼつんと家があり、隣の家ま  
で1キロか2キロメートルく  
らい離れていました。裸馬か

馬車で行き来して、僕たちも  
隣の家のドラム缶の露天風呂  
に入りに行きました。毎日大  
鎌を振るって牧草刈りをしま

した。

親方はまだ23歳くらいの独  
身青年でジャージー種の親牛  
2頭と子牛1頭を飼っていま  
した。見渡す限りの原野が広  
がっており、夕日が沈むころ  
遠く地平線に雌阿寒岳と雄阿  
寒岳がうつすらと見え、「ミ  
レーの晩鐘」を思い出させま  
した。

実習を終え、学校に帰って来  
た僕に大きな変化が襲いまし  
た。それ迄は理科系の学校に  
進む道を考えていたのですが、  
あの根釧原野の開拓地が僕の  
頭の中を一杯にして、広大な  
原野を開拓してみたいという  
夢が膨らみつつありました。

若いとはいえ自分に開拓農家  
が現実に来るのか、祈って  
いると不思議に力が湧いてき  
ました。

『祈り求めるものはすべて既  
に得られたと信じなさい。そ  
うすればその通りになる。』  
(マルコ11の24)

と示され、「祈ってなしたことは失敗してもそれは成功、神様が全て取り計らったことである」と父がいつも言っていた言葉と重なり心に響きました。そうだ神様に全てをお任せすればいいんだ。

鈴木校長先生に相談したところ、北海道にある酪農学園に樋浦誠先生という立派な方がおられるからそこへ行きなさいと。

入学が許された酪農短期大学は、広い牧草地の中にポツンと細長い校舎で教室と実験室が幾つか並んでいて150人ばかりの小さな学校でした。入学式をした翌日から3日間作業服にスコップを担いで圃場へ行き1メートル余りの深さの明渠を300メートル位掘る仕事を毎日続けました。翌週の月曜日教室に入ってみると現場を取り仕切っていた先生が実は同級生であったり、一緒に働いて話していた同級

生が実は先生であったり、全国から集まった仲間はこちらですっかり打ち解けて、先生と学生が同じYMCAの会員になり、学校行事やクラブ活動、対外的なキリスト者学生同盟の活動などの参加もこのYMCAの総会で決めて行くことを知りました。

半年後、生出 正実(おいでまさみ)さんはその会長に、僕は文化部長と選挙で選ばれ、学校の行事を全員参加の元、盛り上げていくことに一生懸命働きました。この時生出さんとの出会いが無かったら、そして樋浦先生との出会いが無かったら今の瀬棚での農場経営や仲間との三愛活動はなかったと思います、神様が全て整えて下さり、祈りが聞かれたことを感謝しました。

そして次のみ言葉が示されました。『測り縄は麗しい地を示し、私は輝かしい嗣業を受けまし

た。』(詩編16の6)

実学と三愛精神

この学生時代に学んだことは実学と三愛精神であり、自ら農村に入って働く気持ちを益々強くしました。樋浦先生は「新しい農村の建設は、何としても農村に定住する青年の手によって遂行されなければならぬ。」

私は農村青年の前に立つとき、情熱の湧き上がるのを禁じ得ない。語りかけたいからである。言い聞かせたいものを持つているからである。」

我々は2年間、来る日も来る日もこんこんと諭され、時に口角泡を飛ばし、「無知からの解放」を、そして「理想なき人は人らしくない、理想とは何か、未来への夢である。夢未見へのまぼろしである。夢なき人は人らしくない、幻なき人は人間の特殊性を失っているといわねばならぬ」と講

義は延々と続き時間をオーバーすることしばしばでした。

もう一つが三愛精神です。「神を愛し、人を愛し、土を愛する」

これは、つぎの聖句と深く結びついていきます。

『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

(マタイ22章37-39)

私が困難に出会った時、示される御言葉でした。

三愛精神の発祥地デンマーク 北欧の国デンマークは1864年にドイツとの戦いに敗れ、南部の肥沃な土地2州シュレスヴィヒとホルスタインを割譲します。国土の3分の1に相当する地域を失い国民を失い、残された国土は荒廃し



た僅かばかりの土地と絶望と貧困と飢餓の中に置かれまし  
た。疲弊した国民に牧師ニコ  
ライ・グルドビー (1783~  
1872) は当時80歳の高齢でし  
たが「神を愛し、人を愛し、  
国土を愛する」三愛の精神を  
提唱しデンマーク復興の思想  
を説き、明日の国民である青  
年教育の為に国民高等学校を  
創設したのです。

このグルンドビーの思想と精  
神に呼応した教育者クリスチャ  
ン・コール (1816~1870) は  
フォルケ・ホイスコレ (国  
民高等学校) を創設し民主主  
義教育の柱に三愛精神を据え  
青年教育に力を注ぎます。

また、エンリコ・ダルガス  
(1828~1894) は国民の心を  
Outward Loss Inward Gain

「外に失ったものをうちに取  
り戻そう」と、説くと同時に  
ヒース地帯に暗渠を掘り排水  
をよくし、<sup>もみ</sup>樅の木を改良して  
何度も失敗を繰り返しノルウェー

産の樅とアルプス産の小樅を  
交互に植える実験をし、徐々  
に不毛の荒野に緑の牧野が広  
がって行きました。

『剣を打ち直して鋤とし、槍  
を打ち直して鎌とする。』  
(イザヤ2章4~5)

とありますが、まさにこれを  
実行したのでした。ダルガス  
の思いは長男フレデリック・  
ダルガスに引き継がれ親子2  
代にわたって、研究努力した  
結果、やがて森林を作り不毛  
の荒野は緑の大地に代わって  
いき国土を肥沃な農地に変え  
て馬鈴薯や牧草地を増やし酪  
農大国の基礎を作って行きま  
す。主に全てを捧げた信仰と  
並々ならぬ祈りとが働いて国  
の復興を成し遂げたのであり  
ます。

この事を内村鑑三が1911年  
に今井館で講演し、1923年に  
小冊子となり出版されていま  
す。戦後間もなく岩波書店よ  
り「デンマーク國の話」とし

て「後世への最大遺物」と一  
緒に再出版されました。  
(1946年 岩波文庫発行)

新規就農

酪農に目覚めて後、挫けそう  
になりながらも開拓の夢を持  
ち続けた10年間は私にとつ  
て必要な時でありました。東  
京へ出てアイスクリーム工場  
で働き、八ヶ岳山麓の牧場で  
牧夫として働き、袋井市でデ  
ンマーク人がデンマーク式農  
業を教えるというのでその手  
伝いをし、又、北海道に戻つ  
て開拓地を探しましたがお金  
も信用もない若者に土地を世  
話してくれる人もなく、酪農  
学園の農場や農業高校で働き、  
祈って時の来るのを待ちまし  
た。

ある日、生出さんが来て瀬棚  
と一緒に酪農をやらないかと  
誘いに来ました、瀬棚町や瀬  
棚農協が地域発展のため新し  
い人を求めていることを知り、

生出さんが保証人になって下  
さり38ヘクタールの土地を  
与えられ営農に踏み切りまし  
た。家内と1歳になる息子が  
いましたから周りの友人やお  
世話になった先生方は何も開  
拓地に行かなくても、ここで  
酪農後継者の教育に携わって  
もらいたいと引き止めました  
が、私は自ら農民になりたい、  
そして信仰を共にする仲間を  
一人でも増やしその輪を広げ  
たい。

まだ雪が残っている4月初め、  
乳牛の導入と放牧用の柵作り、  
牧草地への肥料撒き、農耕馬  
の購入と忙しい毎日でした。  
当時の作業は馬が全てで、畑  
に肥料や堆肥を運ぶのも、街  
まで買物に行くのも、収穫  
した牧草を運ぶのも全て馬車  
でした。冬になると雪に閉ざ  
され馬に轡を取り付け、搾つ  
た牛乳を一日おきに町まで二  
日分を運ぶのが日課でした。  
空いている日は山の高台に馬

構で堆肥を運び、馬も人間も汗をかきました。

就農して1か月が経った時、家内が腹痛を訴えて入院し危険な状態であるというので即手術をして一命を助けられました。子宮外妊娠でした。当時の農協組合長の奥さんは腹痛くらいと我慢して働き続け、同じ病気で亡くなったことを後で知りました。

その年の秋、その日は沢を挟んで隣の農家でデントコーンの収穫作業をしている時、家内が血相を変えて走ってきました。当時はまだ電話がありません。どうした、と言うと牛が倒れている。熊が出たのではないか。若い数人の者とわが家へ走って行くと牧草地の真ん中で大きなお腹を膨らませて一頭の親牛が倒れていました。恐る恐る近付いてみると牧草のクローバーを食べ過ぎて胃袋にガスがたまっただけで、食道を圧迫し窒息死した誇張

症だと分かりました。

一番大事にしていた乳牛でした。その後牛の事故は続きました。そのたびに、『あなた方のあった試練で、世の常でないものはない。神は真実である。』

あなた方を耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えて下さるのである』

(一コリント10章13節)  
を読みながら祈りました。

私が酪農を始めたことを大変喜んで下さった独立学園の榎本忠雄先生が修学旅行生と共に1週間働いて下さいました。それから修学旅行生の実習は50年も続いています。その中から新規就農した仲間が少しずつ増え、同じ志を持つ仲間が今は10軒余りになりました。

私が就農した1968年頃は北海道の酪農家戸数は4万

1100戸が営農していました。現在6700戸が北海道の酪農を支えています。その中の10戸が瀬棚の仲間です。100頭200頭今や1000頭規模の酪農集団もいます。しかし瀬棚では30頭か40

頭くらいの規模で家族経営と地域の活性化や周りの農家との交流を大切にしながらゆとりある経営をしています。

「300ヘクタールの土地を一軒で300頭の牛を飼うのに比べ、30ヘクタールずつ10軒の農家が30頭ずつ牛を飼うと地域は活性化され村は生まれ変わります。」

神様の成さることは目に見えない時と見えない時があります。今考えると全てを神様が導いて下さり、苦しくて辛い時も泣きながら、どうしてこんな事にとと思う時も、そして楽しい時、喜びを何倍にもして分かち合う時も、共に祈り神様のみ声に耳を傾ける信仰の友

が近くにいることに感謝します。と同時に全国に全世界に「神を愛し、人を愛し、土を愛する」三愛の精神がみ言葉と共に伝えられることを祈りいたします。

混じりけのない霊の糧

貝出 久美子  
(看護師・徳島)

わたしは、家に仏壇と神棚があり、朝に晩に仏壇を拝む母をみながら、キリスト教とはほとんど接することのない、一般的な日本の家庭で育ちました。

そんな中、わたしはある出来事から、心の中に深いブラックホールのような闇ができてしまいました。その闇は、わたしが元気に生きようとする思いや、まっすぐに進もうとする思いを、強い力で吸い込んで闇の中に引きずり込もうとする、そんな力がありました。楽しいことがあると、お

まえは楽しんではいけないうと、いい、幸せになろうとすると、き、おまえにその値打ちがあるのか、と言ってくる。

そんな闇を抱えながらも、ごまかしながら、また、一時的に忘れながら元気に看護師の仕事をし、友人と楽しく笑い、家庭での生活もしていました。闇は思い出したように語りかけてきましたが日常生活は忙しく、仕事と子育て、家の中で時間に追われ、疲れながら闇を振り払い生きていました。

二人目の子どもが与えられ育児休暇中のことでした。何かで見て、徳島のいのちの電話主催の講演会にいきました。誰が何を話したか、今は覚えていませんがその講演にわたしは感動しアンケートのようなものに住所とか名前を書いてきました。

ある日、郵便が届きました。いのちの電話を主催している

教会からのもので、教会堂を建てた、だから、献金してください、という案内でした。わたしは、その図々しさに驚きました。講演を聴いただけなのに献金の催促。だから宗教はいやだと思いました。そして、そんな教会をためしに見てみようと思いました。

ある日、乳児の次男を連れて、その新しい教会に行きました。優しい牧師が笑顔でできて歓迎してくれました。わたしは牧師に聞きました。「神様はどんな罪でも赦してくれませんか？」それは、わたしの中の闇、ブラックホールの重さからでた叫びでした。牧師は優しく、しかし確信を持って答えてくれました。「どんな罪でも赦してください。」

そして、日曜日の礼拝に来るように勧められました。わたしはその教会に行き、はじめてキリスト教の礼拝に出

席しました。そのときのメッセージは「捧げることの大切さ」についてでした。やっぱり宗教はこうやって献金を集めるのだ、と思い、もう教会に行くのはやめようと思いました。

それから、わたしの中に大きな疑問がわいてきました。神様はいるのか、いないのか。それはもう、どうでもいいことではなくなりました。確信がないままではいられない。とても苦しく、頭の中がその疑問でいっぱいになりました。「神様、いるんですか、いないんですか、どっちなんですか。いるならいるで、わたしにわからせてください」と、何かに対して叫びながら、過ぎました。

そして、これで最後にしようとして再度礼拝にいきました。牧師のメッセージは放蕩息子のお話でした。放蕩三昧をした息子がみすばらしい姿で帰っ

てきた。父親は急いで駆け寄り息子を迎えて抱きしめた。もちろん、初めて聴く話です。

話を聞いているとき、突然、わたしの後に、まぶしく荘厳な光が現われたことを感じました。わたしは後の方に座っていて後には誰もいません。怖く神様だ、と思いました。怖くて後を振り返る勇氣はなかったけれど、その荘厳な神様の光は、放蕩息子と同じようにわたしを待ち続け、赦し、駆けより、抱きしめてください。ていることがわかりました。神様はいた。そして神様にわたしは赦されている。主によって示され、涙が止りませんでした。

家に帰り、中学生の時ギデオンの協会でいただいた聖書を開きました。関心もなく読んでも意味のわからなかった聖書のことばが心に染み込み、聖書は神様からのメッセージだとわかりました。昔の偉人

にしか思えなかつたイエス・キリストが神でありわたしを救ってくださった。「放蕩息子のおたとえ」という神の言葉をとおして信仰が与えられ、心は喜びと平安に満ち、この道をまっすぐに歩んでいくはずでした。

しかし、わたしは、教会には出席しても、祈りもせず、聖書を読むのもやめてしまいました。祈りは呼吸だよ、と牧師にいわれ、牧師婦人からは「人を見ないで神様だけを見つめて」と言われていましたが、神様をみつめなくなりました。

月日が過ぎ、この世の力に引き込まれ、心はさまよい始めました。神様を知らされながら、キリストの救いがわからなくなつたわたしは、惨めでした。

神の光を感じたという不思議な体験は、事実として頭でわかつていても、力にならなく

なりました。以前、闇をごまかすために飲んでいたお酒を再びたくさん飲むようになり、自分でもどうすることもできず、紛らわせていました。

わたしは、自分が壊れた、生きていくのに死んでいると感じていました。その頃のわたしは不安定で感情的になり、主人にも子供たちにも申し訳なかつたと思っています。

ある牧師が書いた本に「自転車壊れたら自転車屋に持っていく、時計壊れたら時計屋に持っていく、わたしたちの心が壊れたら、創り主である神様のところにもっていく必要がある、創つたので直せる」とありました。神様の所に持って行きたい、でもどうしたらいいのかわかりませんでした。

心を紛らわせ生き甲斐を見つげるために新しいことを始めよう、と思つたときに高校時代の親しい友人から手話を

勧められました。主人が家事やこどもの世話の協力をしてくれたので、仕事が終わって、手話サークルに行き始めました。でも、闇は抱えたままでした。手話サークル会場の近くにカトリック教会がありました。そこはドアが開いていて自由に祈りができるようになっていました。サークルが始まるまでの時間そこでわたしは祈りました。

「神様、わたしは壊れました。助けてください。手話に行つていますが、手話で助かるなら手話で助けてください。壊れたので神様に直して欲しいです。助けてください」

サークルの始まる前の時間、何回も祈りました。これだけ祈つたのだから奇跡が起こっているかも、とそつと目を開けたりしてみても何も変わりません。神様は遠く、わたしはどうしたらいいか、わかりませんでした。

そんな中、わたしは手話にはまりました。手話で会話ができることが素晴らしいと思つていたある日、通い続けていた教会の受付に「世の光」という伝道用チラシが置かれていて、それにごく小さく、徳島聖書キリスト集会が紹介されており、土曜日、手話の学びがあると書かれていました。手話が学びたかったので行くことにしました。

数センチの小さな記事。それがわたしにとつて命への入り口となっていました。扉はどこにあるかわかりません。

土曜日にそこで手話を学びはじめました。手話だけでなく聖書の話や賛美がありました。が、話を聞いてもピンとこず、「いのちの水」誌の前身の「はこ舟」誌を手渡されていたけれど、難しく感じて読みませんでした。

そんなある日、手渡されていた「はこ舟」をふと読みまし

た。マザー・テレサのことが書かれていて心に残りました。そのとき夕拝に誘ってくれていたことが思い起こされました。

「そうだ、話を聞いてみよう、と駐車場で祈って夕拝にいきました。エゼキエル書を学んでいました。神殿建築がどうの、至聖所がどうの、チンブロンキャンプでした。難しすぎる、と場違いな自分を感じているとき、新約聖書ではなんと書かれているか、と説明がありました。それは「あなたがあたが、神の神殿である。」という箇所でした。

「わたしが神の神殿！」

その瞬間に、神様を見失った。はじめな自分が映像のように心の中に照らし出されました。神様を知らされてなお、立ち帰らないでお酒を飲みふらふらになっっているわたし。どうしたらいいかわからないで、この世のもので必死にこまかしているわたし。

足をすくわれて壊れてしまい、生きていくのに死んでいるようなわたし。つぎつぎと自分はじめな罪の姿が心に照らし出されました。

「おまえは神の神殿であるのにどうしたことが。」

心の中を照らし出す光はわたしに迫ります。裁きの光です。でも、とても温かい裁きでした。裁きながら、「つかったなあ」「わかっている」「もういい」「大丈夫」という赦しに包まれました。

裁きと赦しが同時に与えられたのです。そして、心に巻き付いていた鎖がはずれました。闇が消えていき、わたしは再び神様に立ち帰ることができました。平安と喜びが与えられ、そして、目の前に飛び込み台があるように思いました。わたしは思い切って飛び込んでみよう、と思いました。

それから夕拝に参加するようになり、メッセージをきいているうちに、聖書からのメッ

セージを受けることのすばらしさを感じ、通っていた教会から徳島聖書キリスト集会に変わりたいと思うようになりました。

代表者の吉村さんに相談すると、「十年祈っても思いが変わらなければ教会を変わりたい」といわれ、驚きました。十年は長すぎる。でも、み心ならば従おうと思いました。

真実の礼拝に少しでも触れたかったのでしょう、わたしは通っていた教会の礼拝が終つてから急いで集会場に来て、見つからないように玄関にすわり、みんなが出て来そうになると逃げて帰っていました。もどかしくてある日、神様に一生懸命に祈りました。「神様、わたしは教会を変わりたい。」真剣に祈りつつ聖書を読みました。

「生まれればかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるよ

うになるためです。」

(第一ペテロ二章二)

みことばが迫り、神様が教会を変わりたい、と言ってくれました。わたしは飛び上がるような思いで、吉村さんに報告しました。

迷いはありませんでした。教会の牧師にも徳島聖書キリスト集会に変わりたいと伝えました。牧師は「あなたの信仰の成長のためなら応援します」と言われ快く出してくれました。牧師夫妻は今でも訪問すると温かく迎えてくれます。

そして徳島聖書キリスト集会に導かれました。毎回の礼拝で御言葉を受けつつ今があります。主の名によって集まるところに主イエスがいてくださる。集まり支え合うこと、御言葉を受けること、祈ること、それで命が続いているのだと感じています。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」

(出エジプト二十・二)

この言葉を聞いたとき、その通りだと思いました。神に背き、神から離れさせる力、罪の力、それは自分の力では戦えませんでした。

そこから導きだし、そして、命の道を毎日歩き続ける力、それは、神様が後に立って下さった不思議な体験でも、夕拝で感じた赦しの光でもない。それらの体験は、聖霊によってわたしの霊の目が開かれたときであり、それがなければ、神様を信じることも立ち帰ることもできませんでした。

しかし、そこから純粹な霊の糧、神の言葉を慕い求め続けることがなければ、そして、「主よ」と呼びかけ、主と交わり、祈ることがなければ、再び心は死んでしまうのだと思ひ知らされました。

神の言葉によって成長があり救いがある、そして、純粹な霊の糧を求めるために集會に導かれたのだと感じています。

わたしは無教会主義に共感して

学びを求めて集會に来たのではなく、ただ手話を学ぶために数センチの案内を見て集會に来ました。混じりけのない霊の乳がここにあるからこそ、神様はそれを求めなさいと言われたのだと思います。

それから、辛いこと、苦しいこと、失敗、間違い、いっぱいあり情けない思いの繰り返しですが、主に向えば心が変えられ、また御言葉に導かれ前に進むことができます。

主の体である集會で共に礼拝し、また県内外の集會に参加することにつながりが広がり、信仰の友が与えられました。

またアシラムという聖書に聞き、祈り合うあつまりとの出合いも与えられました。超教派で集まり共に祈るとき、組織や儀式の問題も全て越えてひとつになれることを実感します。そして離れても互いに祈り合う。それは、大きな支えとなります。

「祈りの友」の集まりも超教派です。祈られ祈るだけのつながりは会うことが出来なくても病床にあってもひとつの集會です。

苦しかったブラックホールのような闇の力を覚えています。精神科病棟での勤務で心病む人たちと出会ってききました。

それは自分自身と重なりました。これからも、闇に苦しむ人たちが、どうか、神の言葉によって救い出されますようにと願ってやみません。

### 神に従う者は命を持つ

永井 信子

(いずみの森聖書集會代表)

「あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす灯」(詩編119の105)

「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」

(ヨハネによる福音書8の12)

主イエスは、「わたしについてきたい者は自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい。」と言われました。

ついてくるのは自由だが、ついてくるなら自分という自我を捨てて空っぽの心で、自分の現実を背負って従ってきなさい。そうすれば闇の中を歩かず、主の命の光を持つ、と言われています。

「神を愛し自分を愛するように人を愛しなさい」との御言葉では、自分を愛することが出来なければ人を愛せないということになります。少年犯罪をしてしまう人の多くは、人から愛されている実感がないので、自分を好きになれないことが要因の一つにあります。私は保護観察をしていて、トマトはトマトのままメロンはメロンのままで神様は愛してくださっていることを伝え

るようにしています。また、「私にとつてあなたは尊い」との御言葉で心の平安を得た人から人へと伝わっているのを聞くとき神様は本当に生きて働いているのを実感します。

神様が試練を与えられるのは、無力さ、弱さ、愛せないことに気づかせ、神様にしか救いはないことを知らせるためです。神様の愛は無限です。

自分に与えられた現実を背負っていく、それが神を愛することだと思えます。祈りが聞かれないと思つてもあきらめず祈る。神様につながつているとは、祈り続けることだと思つています。執拗に祈つて神様につながつていけば、必ず祈りは聞かれると信じて祈る、主イエスが、血と汗が出るほど祈られたように、霊と真とをもつて必死に祈る。すぐに答えてくださらなくてもその時を待つ。神様の方は、いつ自分のところへ帰ってくるか待つておられる。放蕩息

子が悔い改めて帰るのをずっと待つていたよ。」

ニューヨークにあるリハビリテーションの待合室の壁に掛けられているという「応えられた祈り」という詩があります。

「功績を立てようと、神に力を求めたのに 謙虚に服従するようにと 弱さを与えられた。」

より大きなことをしようとして、健康を祈り求めたのに より良いことをするように 病気を与えられた。

幸福になるようにと、富を求めたのに、賢くなるようにと 貧しさを与えられた。人々の賞賛を得ようと、力を祈り求めたのに 神の必要を感じるようにと、弱さを与えられた。

祈り求めたものは何一つ与えられなかったのに 実は私が望んでいたすべてのものが与えられた。

「このような私にもかわらぬ、私の言葉にならない祈りは応えられ、すべての人に勝つて、私は最も豊かな祝福を与えられたのだ。」

祝福を与えられること、ほかの人のために祝福を祈ること、悪を行つている人を呪わず、祝福を祈ること、それが神様の御心です。御心にかなし生き方をしていくには、私たちは常に命の水を飲んでいなければ枯れてしまいます。

パンだけで生きるのではなく、神の言葉で生きるために、命の水が必要です。「主よ、御言葉のとおり、命を得させてください。」(詩編119の107)との祈りを続けていきたいと思ひます。

最後に、絶望から希望へ変えられた、ひとりの死刑囚の書簡「死に勝つもの」という本の中から、一部分を読ませていただきます。手

紙はあるキリスト者へ宛てたもので、35通あります。その中からいくつかを引用します。

「新たに主にありて生まれた我々は、明日を思うことなく、与えられた現在を十二分に神への服従に従つて全うすることが務めですから、毎日毎日が最後の日であり、主の再びこの世に来る日でなければなりません。」

私たちのような現実の生活ではともすれば悪魔の試みに誘惑されそうな毎日を送つている者には、祈る時間と、聖書によつて読んだ御言葉を体内に完全に消化して力とする二つの方法だけが、悪魔の絶え間ない誘惑に勝ち得る唯一の道だと思ひます。」

「されど主の御言葉は永遠に保つたり。とは何とありがたき福音でありましようか。ここに生きる希望を見出し得た

以上、もう地上における苦悩などは問題ではありません。」

「私は今規制の許される範囲内に福音を語っております。厳しい独房生活にありますので、伝道はなかなか苦心が伴います。主は常により機会を与えてくださいますので感謝です。最近職員の方も非常に私どもの信仰にご理解くださるので感謝しております。私は今真剣に同囚達に福音を呼び掛けております。」

「人間は皆死期の定まってい

ない死刑囚なのです。死刑囚でない生命は神を信じて獲得した生命のみです。この生命こそ私どもに大きな希望、歓喜、自由、平安、幸福、満足を味わせてくださるのです。ハレルヤ！」

「現在の私にもし信仰がなかったとしたら、おそらくこの現実の苦痛に発狂するか、ある

いは自殺するか、このいずれかを選び取ったであろう。こうしたことを今心静かに思い浮かべ、唯一の活ける主に選ばれ、その御救いに与れたことを深く感謝しております。」

次は最後の手紙です。刑の執行は突然来るので、この人はその時を悟ったのかもしれない。

「罪びとの首である私達、この私達の全罪を、尊い御子イエスキリスト様に負わせたまい、罪と死と、滅亡のみの世界から永遠の希望と喜びの世界に引き上げてくださった、父なる神の御愛と恵みに感謝するばかりでございます。」

ほむべきかな、わが父、あゝほむべきかな、わが主イエスキリスト様の御愛、本当に神様の広大な恩愛には、ただただ感謝し御名を賛美するほかありません。ハレルヤ。ハレルヤ。そして、「わが罪を知れば知

るほど身に沁みる、十字架の上の主の愛をば」

主イエスは、もう一度来て新しい天と地を造ると約束されました。その日「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。」

「主よ 来てください」闇夜の中に。来てください。主よ 来てください。新天新地を造るために。

### 報告とお知らせ

○第30回 キリスト教(無教会)全国集会について。

今回のテーマは、「神の言葉 希望に生きる」でした。

それは、日本や海外においても、希望を打ち砕くようなできごとが次々と生じており、そのようなところにこそ、聖書で約束されていること、神

の言葉が注がれ、闇に光あれ！とのみ言葉を受けて、じつさに命の光を与えられたいと願ったからです。

それはそうした問題に関しての議論や知識の開示、あるいは研究発表によってではなく、ただ、わたしども一人一人が自らの弱さ、罪深さを知り、そこから集つてともに神を仰ぎ、祈り、賛美し、み言葉を受けていくこと、そうしてキリストそのものである聖霊を受けられることです。

心身が弱り、苦しむ者にとつて、多くの知識や論文、研究的内容を理解することなどとてもできないことです。

しかし、その苦しみや悲しみのなかから、神を仰ぎ、神に叫ぶこと、そしてまたともに神への祈りとともに賛美の歌を歌うことはできることです。

ああ、幸いだ。悲しむ者は。なぜなら、その人たちは、神によって励まされ、慰められるからだ。という主イエスの



約束を思いいます。

今回は、会場の都合もあり、分科会をつくらず、一日目の夜の「祈りの友」の会と、若者の会、そして二日目の主日の早朝の早朝祈祷以外は、すべて全体会場で行なわれました。

それによって、参加者と相互

に出会う機会がふやされ、より親しみのわくものとなったとの感想も寄せられています。

たしかに、二日間を通じて、比較的多くとっていた休憩時間や食事時間のときに、いつも140名ほどの人たちと自由に交わり、食事ともにし、どなたとでも主にある交流、お話しができますので、いつもの全国集会にはない、親しみある関わりが与えられたのを思います。そのうえに、全国集会前日の夜にも2時間(37名参加)、全国集会終了後にも場所を徳島聖書キリスト集会場にかえて、やはり2

時間(25名参加)の交流集会をも開くことができました。

一人一人に、神のみ言葉を届けたい、そのためには、多くの方々のよってじっさいに神の言葉が与えられたという生きた証言を語ってもらおうという方針でプログラムが作成されました。

そのため、聖書講話も10分、30分という短い時間で、4名の方々によりなされ、証しも、二日間を通して7名の方々が20分ずつ語っていたことができました。

さらに、当日指名の7名の方々には5分という短い時間で、自由に信仰の経験、考えていること、み言葉、賛美、書物のことなどを語っていただくという時間を今回初めて特設しました。

そして、音楽、賛美を用いたプログラムも土曜日、日曜日とそれぞれ二つずつ入れられました。

一つは音楽の賜物が与えられ

た方々による演奏と賛美、証しとメッセージ、そして会衆賛美を組み込んだ内容、一つは徳島聖書キリスト集会員による、手話讚美やデュエット、コーラスなどです。

賛美とは、祈りであり、またしばしばみ言葉そのものでもあります。

言葉によつては心に入っていない場合でも、賛美によつて深く心に入り、魂をゆすぶられることもあります。

これも、一般の歌とちがつて、主に向つて歌われる賛美によつて、神の言葉の力が各人に注がれることを期待してのプログラムでした。

こうして、聖書からのメッセージと証しは、18名の方々によつてなされ、さらに、閉会礼拝のときには、数組のご夫妻を含む8名ほどの方々が、3分以内で、今回の集会全体にわたつて、み言葉にかかわる感想を語られましたので、25名ほどの方々が、壇上で参

加者に向つて語りかけることになりました。

こうした多様な方々によつて、受けとられた神の言葉が、参加者全体の心へと波のように伝わっていったのを感じたのです。そしてその波動の根源は、神であり、キリストだったので。

今回の全国集会では、沖縄から、北海道まで、132名が申込され、そのうち、病気や家族や仕事の事情で何名かが参加できなくなりました。

他方、いろいろな事情で、申込できていなかった方々が、追加参加者として、当日に、県内から、10名(判明分)が参加され、そのほかに、一日だけ、部分参加された方もあったようで、約140名が集うことができました。

私たちのキリスト者の集いが、全国集会であれ、日曜日ごとの集いや家庭集会であれ、この愛の神、キリストに出会う

こと、そして直接に生けるキリストからの言葉を受けることが目標です。

今回の全国集会在そのような目的に少しでもかなうことがなされたのを信じ、主のみわざとして、心からの感謝をさげます。

### お知らせ

#### ○全国集会の録音CD

今回の全国集会の全部の内容が録音され、MP3形式でCDにされます。

ご希望の方は、つぎの4種類のCDのうちいずれを何枚希望するかを書いて、奥付にある吉村孝雄まで申込してください。メール、FAX、ハガキなどで。

プログラム全体(全国集会の前後の交流会も含む)をプログラム順に録音したCD。

4人の聖書講話だけのCD。全体の自己紹介、7名の証し、やはり7名による5分の信仰感話、閉会集会の7人による感想など。

今回の全国集会で用いられた賛美だけを録音したCD。

今回は、約30曲を用いています。それは、讚美歌、讚美歌21、新聖歌、つかわしてください、世界の讚美、リビングプレイズ、プレイズ&ワッ

シップ、友よ歌おう、等々の讚美集から選ばれています。さらに「祈りの友」の歌も含んでいます。

この賛美集CDには、武義和さんや安彦 直穂さんによる特別讚美、徳島聖書キリスト集会員による賛美も含まれます。

価格は、CD一枚200円(送料込)です。代金の送付は、郵便振替、あるいは200円以下の少額切手でもかまいません。

○吉村への電話は、左記の奥付の固定電話にかからないときは次の電話のいずれかにかけてください。

・088-631-5123  
・携帯 080-6284-3712

○なお、全国集會他いろいろな事情のために、多くの方々からの協力費やお手紙などにも返信ができない場合が多くなっています。申し訳ないことですが、お許しください。

○今月号は、全国集會のためにとくに時間がなく校正もできなかつたので、入力ミスなどもあると思われるます。

それらに気付いた方は、お手数ですが、「ご一報くだされば幸いです。ネット版では訂正したものを提示できるからです。

#### 徳島聖書キリスト集會案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目1の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日午前10時30分(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集會：第二水曜日午後一時から集會場にて。・北島集會：板野郡北島町の戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より。北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)

・天宝堂集會：徳島市応神町の天宝堂はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日午後8時。

・海陽集會、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第一火曜日午前10時より)。

・いのちのさと集會：徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より「いのちのさと」作業所)。

・藍住集會：第二月曜日の午前10時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)。

・小羊集會：徳島市南島田町の鈴木八里治療院にて。毎月第一月曜午後3時。

・つゆ草集會：毎月第4日曜日午後一時半。

・徳島大

学病院8階個室での集まり。

・祈禱集會が第一回金曜日午前10時30分。

・第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、問い合わせは左記へ。

著者・発行人 吉村孝雄 〒777-3100 一五 小松島市中田町字西山九一の二四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意) 郵便振替口座 ○一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送ってください。(これは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: pististry12@hotmail.com